

天童寺世代考（二）

吉田道興

はじめに

拙稿は、『愛知学院大学禅研究所紀要』第十二号所載「天童寺世代考（一）」（開山義興より応庵曇華までの世代）の続篇であり、本号は慈航了朴（樸）より無際了派までの世代に関して、その行実を記した。前回もそうであったが今回も天童寺における史実の史料が少なく各世代のプロファイルに触れた程度であり、天童寺の様子を充分窺い知れないのは誠に残念である。また世代に関しても全ての灯史類やその他の史料、さらに研究書などを網羅するに越したことはないが、筆者の力量からそれにも限界がある。一応、区切りのついた所で気がつく範囲の史料の補訂をする所存である。

各世代の史料を示す箇所で『寺志』『統志』『統藏』と略称した底本は次の通りである。

天童寺世代考（一）（吉田）

寺志——天童寺志「中国仏寺史志彙刊、第一輯、第13冊・第14冊。台灣明文書局印行」（光緒十三刊）

統志——天童寺統志「中國寧波市天一閣藏本」（民国九序刊）
統藏——正統藏經「香港影印統藏經会刊本」（大日本統藏經の影印）

前回分の「正誤表」は、末尾に附す。また人名によく出る「庵」と「菴」は、史料によってまちまちであるが、今回はすべて「庵」の字に統一した。

慈航了朴（樸）

福州（福建省）の人、出家年代や尋師訪道に関しては不明。育王寺十五代の無示介謹△一〇八〇～一二四八▽の法嗣、臨濟宗黃龍派下に属す。法兄に心聞曇賀△生没年不詳▽

がいる。その心聞の法嗣が雪庵徒瑾へ一一七〇一二〇〇▽であり、後に雪庵も慈航と同様に天童景德寺に入院している。

『寺志』卷三には、「備伝」(慈航の略伝)を所載するが、その原初の典拠は『叢林盛事』等も参照したと思われるもの詳しく述べて不明である。また『続志』卷上の「附訂正、宋元諸祖代次記」の記事は、明らかに『叢林盛事』に所載するものである。次にその前半にある記事の一部を引用しておきたい。

師閩人。稟質修黒。状若応真、嗣無示謳、初住明之蘆山、遷育王未幾、移居海上万寿。応庵帰寂於天童、太守聞其風、命樸繼席。是夜太白耆旧、皆夢有鉄羅漢、自舟中而帰方丈。

これに拠れば、無示に嗣法後、明州の蘆山(慈谿県西南の地、東南に白龍禪寺があった)に住し、阿育王山広利寺に遷つて間もなく海上の万寿寺(未詳)に移居していた際、応庵が天童山景德寺において示寂した(隆興元年(一一六三)六月十三日である)。そこで太守は慈航の道風を聞き、天童景德寺へ繼席させたというものである。これが事実とすれば、その応庵の寂後、間もなく入院したことになろう。なお末尾の

逸話は、慈航の風貌に相應した偉人力を示すものであろう。

天童景德寺の住持になつてからの行実に関しては、『寺志』にいくつか散見する。まず卷二の「建置考」上と卷三の「先覚考」と卷四の「盛典考」の箇所には、淳熙五年(一一七八)孝宗帝に招かれ入内し、御書「太白名山」の宸翰四大字を賜わり、その真蹟を雲章閣を建て叢蔵した、とある。また卷四の「盛典考」に「宋孝宗皇帝、召天童寺僧了朴入禁内講道」との記事により「禁内(宮城内)講道」のあつたことも知られる。孝宗帝(在位一一六二~一八九)の頃に以上の諸事があつた訳である。なお卷三の「略伝」には、二十年間主席として止住し、大衆と食を同じうして熱心に僧徒を訓育したことなどが記されていることからその人格の一端が窺える。

慈航の没年を記す史料はないが、前掲の「略伝」中に「主席二十年」とある記事と密庵の入院である淳熙十一年(一一八四)正月とを勘案すると、その前年中に示寂したものと推定される。また『阿育王山續志』卷十六には「第二十二代慈航朴禪師(二月初八日忌)」とあるのでこれも史実とすれば、淳熙十年二月八日示寂ということになろうか。『寺志』卷七に慈航の塔は寺の西、新庵上にあつた、と記す。

法嗣に雪林(雪竇)僧彦と太平詔・本真がいる。また門人

には『攻媿集』卷百十所載の「瑞巖谷庵禪師塔銘」の谷庵景蒙へ一二四一一一八一▽がいる。谷庵は前記の心聞曇賀の法嗣で雪庵從瑾の法兄に当る。

○慈航史料

- (1)『叢林盛事』卷上〔続藏一四八、三二c~d〕末尾に蘆山における「上堂」語を記す。
- (2)『普灯錄』卷一七〔続藏一三七、一三〇b〕「慶元府天童慧航了朴禪師七閩人行實未詳」とあり、「上堂」語三種と「室中問僧」一種がある。「慧」の字は目録では「慈」に作る。「慧」は誤植であろう。
- (3)『続古尊宿語要』卷四〔慈航了朴禪師語要〕〔続藏一九、三一c~三二b〕「上堂」語九種は(1)(2)にないもの。九種目は天童景德寺のもの。末尾に「呈無示和尚」語一種がある。
- (4)『五灯会元』卷一八〔続藏一三八、三六〇a~b〕(2)の「上堂」語三種と(3)の天童景德寺のもの、(1)の「上堂」語一種を所収する。なお天童景德寺の「上堂」語とは次の通りである。
- 觀音嚴玲瓈瓈、太白石丁丁東東。西園菜蠅似レ不レ堪

天童寺世代考(2) (吉田)

、食、東谷花発却無レ頼レ紅。且道、是祖意教意。途中受用、世諦流布。若辨不出、雪峰覆却飯桶。若辨得出、甘贊礼ニ拌蒸籠。参。

(5)『禪宗正脈』卷九〔続藏一四六、一六〇a〕前掲の天童景德寺の「上堂」語一種のみ。

(6)『続伝灯錄』卷三三〔正藏五一、六九九b〕育王謙禪師法嗣「慶元府天童慈航了朴禪師」前掲の(4)と同じ。

(7)『五灯全書』卷四〇〔続藏一四〇、四六三c~d〕「慶元府天童慈航了朴禪師」(4)(6)に同じ。

(8)『寺志』卷三〔一九六一九〕「備伝」(略伝)の記事中、冒頭の受戒など数箇所の典拠は不明。卷五〔三三五一六〕の雲蹤考の「景蒙禪師」は慈航の門人であり、景蒙は『攻媿集』卷一一〇にその塔銘「瑞巖谷庵禪師塔銘が」ある。卷六〔四一五一七〕には、前掲(1)~(4)の「上堂」語中より五種を所収。卷七〔四八八〕には慈航の塔の位置「寺西新庵上」を示している。なお卷二〔八七〕と卷三〔二九六一七〕の文中、および卷四〔三〇八〕には孝宗皇帝の御書「太白名山」を下賜されたこと、卷四〔二九三〕には「入禁内講道」のことが記されている。

(9)『阿育王山續志』卷一六〔中國仏寺史志彙刊一一二、

八九二】に慈航の世代数と忌月日、本師の無示の略伝と「宗乘提唱」は卷九「四四〇」、「一」、その世代数と忌月日は卷一六「八九一」に各々記されている。

(10)『攻媿集』には、(7)の「瑞巖谷庵禪師塔銘」の他にも多数の禅宗資料が存する。これに関しては前回にも挙げた「攻媿集にみられる禅宗資料—投子義青の法系を中心として—」〔東方宗教、第39号、昭和四七年四月、石井修道〕の論文を参照した。

(11)『仏祖統紀』卷五一「正藏四九、四五二b」孝宗帝の御書「太石名山」下賜の記事。

(12)『枯崖和尚漫録』卷上「続藏一四八、七九b」冒頭に「本真書記福唐朱氏子、棄儒依資福山主祝髮。出嶺遍參叢席、有特立操行、晚得天童慈航印記即帰里之杉溪卓庵居焉。」とある。他の伝記史料に「本真」の名は見当らない。

密庵咸傑△一一八〇一一八六▽

福州福清の人、俗姓は鄭氏。『語錄』末尾に附載する『塔銘』(葛邲撰)の「年六十有九、臘五十有二」から逆算すると十七歳で剃髪進具したことになろう。その後、善知識を訪

ねて、当時、衢州(浙江省)洞山の明果庵(院)に住していいた応庵曇華△一一〇三△一一六三▽に師事し、遂に印可を受けた。その嗣法の時期は不明である。『塔銘』によればその後に吳門(平江府)の万寿寺(報恩光孝寺)ないし天童景德寺へ応庵に随侍し分座説法している。

『語錄』によれば、乾道三年(一一六七)八月一日、衢州西烏巨山乾明院の請を受け入院、さらに同じく大中祥符寺、金陵(建康府)蔣山の太平興國寺、常州(無錫)の褒忠顯報華藏寺へと転住している。この中、大中祥符寺以下の入院年代と在住期間の記述はない。次に淳熙四年(一一七七)正月七日、臨安府徑山の興聖万寿寺の請を受け入院、また同七年(一一八〇)六月二十四日、同じく景德靈隱寺の請を受け入院、同十年八月三日に靈隱寺を退堂し、平江府の元知府庵に隠棲した。

淳熙十一年(一一八四)正月、天童景德寺の請を受け、元知府庵にて上堂している。

拳先応庵受天童請一日偈畢、乃云、山僧亦有一偈、拳示大衆。去年八月間、得旨与安閑、擺動雲水性、縱步到陽山。元宅諸子弟、忻然力追攀。庵居三箇月、開懷宇宙寬、忽接四明信、來書意盤桓、天童虛法席。使君語猶

端、迢迢遣_ニ專使、不_レ問_ニ路行難、山僧臨_ニ晚景、不_ニ敢自相瞞、槌鼓樂与行、四衆亦欣歎。先師未了底、應_ニ是起_ニ波瀾。敢問_ニ大衆、如何是先師未了底、一回飲水、一回噎。

臨濟德山俱汗顏。

「如何是先師未了底」という師應庵の「受請上堂」語を踏まえたのは、さすが法嗣である。なお天童景德寺における「上堂」語は、『語錄』に十種を数えるが、「入寺上堂」語と記すものはない。しかし、右の「上堂」語の直後にあるものを次に掲げておく。

祖師心印、不_レ涉_ニ言詮。問訊燒香、早成_ニ多事。行_レ棒行_レ喝、開眼尿_レ床、拳_レ古拳_レ今、泥中洗_レ土。別有_ニ向上一路、千聖不_レ伝、總是熟睡饒噏語、衲僧家、心憤憤口俳俳。到_ニ這裏、如何即是。以_ニ払子_ニ擊_ニ禪床_ニ云、衲帳蒙_レ頭万事休。此時山僧都不_レ会。

『寺志』に宏智より密庵までの六禪師を擧げる中、應庵を「十九代住持」、密庵を「二十代住持」とし、慈航を住持の代次に入れていないのはどうしてかと問う、またそれは密庵の『語錄』中、靈隱寺においての際、應庵への嗣承香語に「(奉為) 前住天童山第十八代、先應庵大和尚(用酬法乳之

恩)」とする文を引き、これによつて『寺志』に應庵を十九代としているのは誤りであるといふ。そして法為を十七代、應庵を十八代とするのであるが、そうすれば大休の住持がなかつたことになる。その間の誤りは確証がないのでそのまま兩説を挙げる、としている。ここにおける『続志』の説は、法為の次に應庵を想定している点に誤りがある訳で両者の間に大休を入れるとよいと思われる。大休に関しては、前回(一)において既述している。

『塔銘』によれば、密庵は淳熙十三年(一一八六)六月になり微疾を示し、同十二日に趺坐して逝去したことを記している。年寿六十九歳、法臘五十三年。塔は寺の東、中峰にあつた。

密庵の宗風に關し、『塔銘』には次の如く述べている。

師應機接物、威儀峻整、昼則危坐正襟、以表_ニ衆視。夜則巡堂剔炬、以警_ニ衆昏。純白之行、終老不_レ移、堅固之身、至_レ死不_レ壞。

法嗣には、有名な人に松源崇岳・破庵祖先・曹源道生・枯禪自鏡・松窓澄照、さらに淨慈光・隱靜致柔・笑庵了悟などがいる。門人には無際了派・痴絕道冲、さらに『語錄』の偈頌や法語に多数の道人・禪人・居士の名が見える。この中、

枯禅・松窓・無際・痴絶が後日、景德寺へ入院している。

○密庵史料

- (1)『密庵和尚語錄』一卷〔続蔵一一九、一〇二六。正蔵四七、九五七c~九八三b〕冒頭に張鎡の序(淳熙一五年冬仲月九日)、末尾に葛邲(正議大夫刑部尚書侍読兼太子詹事)の撰による『塔銘』を附載。「衢州西烏巨山乾明禪院語錄」「衢州大中符禪寺語錄」「建康府蔣山太平興國禪寺語錄」「常州褒忠顯報華藏禪寺語錄」「臨安府徑山興聖万寿禪寺語錄」「臨安府景德靈隱禪寺語錄」「明州太白名山天童景德禪寺語錄」「密庵和尚小參」(普説・頌贊・偈頌・法語)より成る。
- (2)『聯灯会要』卷一九〔続蔵一三六、三六八b~c〕「明州天童咸傑禪師」冒頭に師応庵との機縁問答があり、後に「示衆」三種を所載する。
- (3)『嘉泰普灯錄』卷二一〔続蔵一三七、一五一a~b〕「慶元府天童密庵咸傑禪師」に「上堂」語三種、同卷二六〔同、一八九d~一九〇a〕に「天童密庵禪師一則」がある。いずれも(1)に所収する。
- (4)『続古尊宿語要』卷四「密庵傑和尚語(要)」〔続蔵一一九、一八d~二〇b〕^b禪宗集成一二、八一八六b~九b〕よりの抜萃。「上堂」語二〇種、頌古六種、贊諸祖三種を所収。

九、一八d~二〇b。禪宗集成一二、八一八六b~九b〕^bよりの抜萃。「上堂」語二〇種、頌古六種、贊諸祖三種を所収。

(5)『五灯会元』卷二〇〔続蔵一三八、四一四d~五b〕「慶元府天童密庵咸傑禪師」(1)を踏まえた上の「伝記」。

(6)『五家正宗贊』卷二〔続蔵一三五、四七六c~七a〕「密庵傑禪師」(5)を要約したような「略伝」、末尾に希叟の「贊」を附す。

(7)『増集續伝灯錄』卷一〔続蔵一四二、三七三a~c〕「四明天童密庵咸傑禪師」(5)に同じ。

(8)『大明高僧伝』卷八〔正蔵五〇、九三一c~二a〕「明州天童寺沙門訥咸傑伝」(1)(5)(6)を踏まえた「伝記」。

なお出家受戒の年齢を「及壯剃髪進具」としているが、本文に述べたように年寿と法臘から逆算して十七歳頃であると思われる。

(9)『續伝灯錄』卷三四〔正蔵五一、七〇四a~c〕「慶元府天童密庵咸傑禪師」(5)(7)に同じ。

(10)『南宋元明禪林僧宝伝』卷五〔続蔵一三七、三三三b~d〕「密庵^{ヤマ}杰禪師」内容の構成は(6)に似ているが、伝

記は比較的まとまっている。

(11) 『続灯存稿』卷一「続藏一四五、十一b～d」(5)と大同小異。

(12) 『五灯全書』卷四七「続藏一四一、二七a～二八d」
「慶元府天童密庵咸傑禪師」(1)を元に(5)を展開増幅したもの。

(13) 『寺志』卷三「一九九～一〇〇」に「略伝」があり、こゝに「称二十代住持」とあるのは本文に示す通り問題である。卷六「四一九～四二三」に「受請上堂」語と他に「上堂」語二種、「頌」三種、「偈」一種、さらに附録として金山善開の頌「破沙盆」に対する頌、その後に参考として虚堂智愚・雙林元・了庵情欲の「破沙盆」の頌贊を記す。卷七「四八六」には本師応庵への「贊」、同七「四八八～九」には、密雲の塔に関し中峰にあって密雲円悟が重修したこと、昔そこに中峰庵という塔院があつたが久しくして廃したこと、さらに康熙二二二年(一六八三)山曉本哲により重修、なお庵には応庵の祖像を裝供してある、という。その後に中峰明本等六師の贊と偈がある。卷八上「五六五」には『語錄』の序(直閣約齋張磁の撰)、同「五六八」には古林清茂の「寄密庵大師祖

像与断江師師兄偈」と栢堂益の「読密庵禪師語偈」、同「五七一～三」には了庵清欲の「応庵和尚送密庵和尚偈卷後跋」と「密庵和尚墨迹跋」、さらに卷十「七一五」には密雲の撰になる「天童中峰庵仏果応庵両祖語偈碑」の跋文があり、その中の応庵の真蹟は「送傑侍者還郷頌」である。なお密雲の跋文中に「十八代祖応庵華禪師、送十七祖密庵咸傑禪師偈」とあるのは、密雲より逆上つて数えた臨濟宗楊岐派の数であり天童寺の世代数とは関係がない。

(14) 『続志』卷上「一四丁表裏」には『塔銘』の記事(天童寺入院・示寂の年月日)を引き、本文で述べた如く『寺志』の世代数に関し問題ありと指摘している。

(15) 『靈隱寺志』卷三下「中國仏寺史志彙刊一一二三、一六八～九」に「密庵咸^(ヤマ)杰禪師」の略伝がある。靈隱寺の世代数は十八代である。因みに徑山寺は二十五代。

(16) 密庵の行実を間接的に知る史料は、その道友・法嗣・門人等の伝記や語錄を検索すればある程度知り得る(他の諸師についても同じことがいえる)。それらの一として『枯崖和尚漫錄』がある。そこで密庵と法嗣との機縁として卷上「七四a～五a」には松源との、同上「七五c

「d、八〇a」には破庵との、卷中「八一a」には笑庵とのものがある。また門人との機縁として卷上「七七a」に無際了派との、卷下「八八c」には癡絶道冲とのものがある。

- (17) 『釈氏稽古略』卷四〔正藏四九、八九七b〕(5)『五灯会元』を元にした略伝。

(18) 『枯崖和尚漫録』卷中「続藏一四八、八二a(?)b」隱静到柔の法嗣雙杉元が応庵曇華の室中にて密庵に「正法眼」に関して問答を交している。「同上、八六d」には龜峰慧光の法嗣蒙庵元聰が鳥巨山乾明院に住していた密庵に参じたことを伝えている。

『寺志』卷三に密庵咸傑へ一一一八(?)一一八六▽の法嗣であると示しているが、その確証はない。密庵の法嗣として『増集続伝灯録』卷二に十二人、『続伝灯録』卷三十五に九人、『五灯会元続略』卷二に七人を各々列挙しているが、「松窓澄照」の名は見えない。なお密庵の法嗣枯禪自鏡には、「寂窓有照」という法嗣がいる。ところで『続伝灯録』卷三十六の目録には、枯禪の法嗣二人の中に「松窓照」の名がある(伝の記載なし)。寂窓有照は「育王有照」とも称される通り、阿育王山広利禪寺に住している。しかし、その寂窓が天童山へ入院したとの記録は見当らない。従つて松窓と寂窓とは別人とせざるを得ないのであり、手懸りの糸も切れてしまう。

松窓澄照

『寺志』卷三に「師嗣密庵傑」とあるだけで行実等すべて不明である。同書には、浙翁如琰へ一一五一(?)一二二五▽と虛庵懷敞へ*(?)一一九三(?)*▽の間に記しているが、世代順のものではない。『続志』卷上には、無用淨全へ一一三七(?)一二〇七▽と浙翁の間に置き、「存疑」として「師瓜代年期無放、雖列此尚未確」とあるのも同様に何の史料もないところに由来している。

○松窓史料

- (1) 『寺志』卷三〔一一〇(?)一〕
(2) 『続志』卷上「一五丁裏」

浙翁如琰へ一一五一(?)一二二五▽

台州寧海の人、俗姓は周氏。「仏心禪師塔銘」(『平斎文集』卷三一所収)によれば、十五歳で(郷の)淨土院にて出家、

十八歳で祝髪、二十歳で遊方し径山において大慧宗杲の高弟仁（石門仁か、薦福普仁か不明）に参じている。その後の歴参を拙庵（仏照）徳光へ一二二一～一二〇三▽の伝記史料を勘案しながら辿ると、乾道八年（一一七二）頃、台州報恩（光孝）寺に住した拙庵の下に参じて省悟することがあった。同門には海門師齊へ生没年不詳▽や無際了派へ一二四九～一二四▽がいた。淳熙三年（一一七六）春、拙庵が靈隱寺へ入院した際に随侍して接化を受け、さらに同七年（一一八〇）拙庵が育王寺に入院した時にも浙翁が迎え呼ばれ、翌年に得法し分座（説法）している。時に浙翁三十一歳である。その後、浙翁は、南劍の含情・越州の能仁・明州の光孝・建康の蔣山の各寺を歴住している。

『寺志』卷三「伝略」に依れば、嘉定年間（一二〇八～一二二四）の初め、蔣山（江蘇省開善寺か）に住していた際、松源崇岳の法嗣滅翁（天目）文礼へ一六七～一二五〇▽が来参し、浙翁は彼を第一座に推挽した。この時、明極慧祚の法嗣晦巖妙光へ*～一二五三▽も同じく門を叩き、また無準師範の法嗣別山祖智へ一二〇〇～一二六〇▽や密庵咸傑の法嗣枯禅自鏡へ生没年不詳▽なども参じたとしている。この滅翁・晦巖・別山・枯禅はいずれも後に景德寺の住持になつて

いる。

浙翁の法嗣で『五灯会元』の編者で有名な大川普濟へ一二九～一二五三▽の『行状』（靈隱大川禪師行状）に拠れば、大川が越州能仁寺在住の浙翁に参謁し、問答を交して脱然了得し、その後、諸方に遍歴しているうちに浙翁が鍾阜（鍾山・蔣山）から俄かに景德寺へ移り、そこで大川は知藏の職に就き、嘉定十年（一二二七）三月に慶元府の妙勝院（寺）が虚席になつたので請に応じ入院した、とある。従つて浙翁の景德寺入院の年時は、嘉定十年より以前のある時期となる。景德寺住持中の行実は不明であるが、浙翁の法嗣偃溪広聞へ一八九～一二六三▽の『塔銘』（仏智廣聞禪師塔銘）に拠れば、偃溪は浙翁を景德寺に訪ね「趙州洗鉢話」によつて平生の疑情を氷釈した、とある。しかし、その年時は不明である。

浙翁の「塔銘」には、前記四ヶ寺の歴住を記した後に天童山と径山は宸命によつて入院したとの主旨を述べるが、その年時を記していないのである。なお、その「塔銘」の末尾近くに「住山八年」とある。これが径山のものとし、浙翁が径山で示寂したとすれば、径山の入院は、その示寂年より逆算して嘉定十年の夏安居前ということにならうか。そうすると

景德寺の退院もその頃と思われる。

浙翁の最晩年、徑山へ入宋中の道元禪師が參訪していることが『三祖行業記』の記事によって知られる。「又見_ニ淡_マ浙翁於_ニ徑山」(『三代尊行状記』)には「於_ニ徑山_ニ見_ニ淡_マ浙翁」(『建撕記』)には問答までも所載する。しかし、あるだけだが、『建撕記』には問答までも所載する。しかし、その問答の典拠は不明であり、内容上にも不審が残る。

次徑山於_ニ明月堂_ニ○淡老和尚(見)、淡問、幾時到_ニ此間。

答云、四月間、淡云、隨_レ群恁麼來時作麼生、又淡云、也是隨_レ群恁麼來作麼生、是_ニ淡_ハ掌_ニ○

一掌云、這多口阿師。師云、多口阿師即不_レ無、作麼是、淡云、且坐喫茶。—明州本—

この浙翁と道元禪師の邂逅や問答を史実とすれば、道元禪師が如淨に相見する前の嘉定十六年(一二三三)ないし同十七年の頃と推定される。浙翁は、如淨と道交があつた。宝慶元年(一二二五)七月戊寅日、浙翁が示寂(年寿七十五)し、当時、天童景德寺に在住していた如淨の元へ遺書が送られて、そのために如淨は「上堂」している。

(マ) 淵翁遺書至上堂。八月十八日錢塘潮、浙翁声価濶天高、尽教四海弄潮手、徹底窮淵輒一遭、重揀折不辭勞、要透龍門繼鳳毛、忽然收卷還源去、万古曹溪風怒号。

「天童如淨和尚語錄(天童景德寺語錄)」

浙翁の法嗣には、前掲の大川普濟と偃渓広聞の他に弁山了阡・淮海原肇・介石智明・枯春曇・東山道源・芝巖慧洪・夢窓嗣清・竜溪文・孤巖啓がいる。この中、弁山と大川の法嗣石門来が後に景德寺へ入院している。

『塔銘』には、弁山が浙翁の『六会語要』を編集した旨を記すが逸亡している。

○浙翁史料

(1)『仏心禪師塔銘』(洪咨夔撰『平斎(文)集』卷三一。四庫提要一集一別集類、一四〇一六)浙翁の伝記史料として『平斎文集』所収の塔銘の存在を知ったのは石井修道氏の論文「仏照德光と日本達磨宗(下)」「金沢文庫研究、第二〇卷第一二号(通巻二二三号)」によるものであります、ここに記し感謝したい。

(2)『枯崖和尚漫録』巻上「統藏一四八、七三a、七五b、七八b、七八d」には(1)に基づく浙翁の伝記や思想、巻中「同上、八二a、八六c」には浙翁の法嗣である東山道源と大川普濟との機縁、巻下「同上、八七a、九二a」には門下の伊巖玉と南翁明との機縁があり、間接的にそ

の動向が知られる。

(3)『増集続伝録』卷一「[續藏一四二]、三七四～五a」「杭州

州径山浙翁如琰禪師」「上堂」語二種所載。後のものは蔣山においてのものと思われる。

(4)『続伝灯録』卷三五「正藏五三、七〇七a～b」「杭州

徑山如琰禪師」維摩讚偈の一種「毘耶示疾放懃、痴添得時人滿肚疑、不是文殊親勘破。耆些毛病有誰知」を所載。

(5)『五灯嚴燈』卷二〇「[續藏一三九]、四六三a～b」「臨

安府徑山浙翁如琰禪師」(4)に同じ。

(6)『五灯会元續略』卷三「[續藏一三八]、四五〇c」「臨安

府徑山浙翁如琰禪師」(3)の「上堂」語のもの一種。

(7)『続灯存稟』卷一「[續藏一四五]、一六a～b」「杭州徑

山浙翁如琰禪師」(3)の「上堂」語二種に(5)の「贊」を加えたもの。

(8)『五灯全書』卷四七「[續藏一四一]、三三c」「臨安府徑

山浙翁如琰禪師」蔣山における「上堂」語一種と維摩

贊「偈」一種。

(9)『寺志』卷三「[二〇八～二一〇]」に「伝略」、卷六「四二七」に(5)の「贊」と附録として浙翁の遺書に伴う如淨

の「上堂」語(『如淨語録』所収)を所載。

(10)『続志』卷上「[一五丁裏]」には、「靈隱大川禪師行狀」

(『大川普濟禪師語録』所収)の文を引用し、浙翁の天童寺入院は嘉定十年よりも前と推定している。

(11)『徑山志』卷二「[中國仏寺史志彙刊]一一三一、一七八～一八〇」「仏心浙翁禪師」(7)に「書懲私篇略曰」等を

加えてある。末尾に道教思想が混入し、その示寂を(宝慶元年)七月十七日としている。なお同書には浙翁の靈隱寺における世代数を「第三十二代」としている。

(12)『明州阿育王山志』卷九「[中國仏寺史志彙刊]一一二、四九六」「杭州徑山如琰禪師」(5)に同じ。

(13)『靈隱大川禪師行狀』(『大川普濟禪師語録』所収)「[續藏一二一]、一七三b～四a。禪宗集成一五、一〇四八九a～一〇四五九一a」(9)参照。

(14)『(仏智禪師偃溪廣聞)塔銘』(『偃溪廣聞禪師語録』卷下所収)「[續藏一二一]、一五五b～六a。禪宗集成一五、一〇四五三b～五a」

(15)『(天童如淨禪師語録)塔銘』(『天童如淨禪師語録』中の「浙翁遺書至上堂」「[續藏一二四]、四八六b。禪宗集成一二一、一四一～七b」本文参照されたし。同書には

「為浙翁入祖堂」（小仏事の項）もある。その語は「昔從太白凌霄去、今自凌霄太白來、不墮去來生死路。展真云、看。堂堂面目笑咍咍、且道、笑向_ニ阿誰。以真指祖云、大家元是主中主、慣入驢胎與馬胎」というものである。〔同上、四九〇a。同上、一四二二六a〕

(16)『石田法薰禪師語錄』卷一「臨安府淨慈報恩光孝禪寺語錄」中の「浙翁遺書至上堂」〔続藏一二二、六a～b。禅宗集成一六、一一五九a～b〕。その「上堂」語は「千五百人善知識、不念吾宗正岑寂、五峯趨倒浪翻空、大地山河俱失色、金風体露、葉落帰根、只堪惆悵不堪陳」というものであり、両者に道交のあつたことが知られる。

(17)鏡島元隆著『天童如淨禪師の研究』〔一一、一五、一六、三九、七五、七六、八八、一二〇、二九八、三七五〕六〕浙翁の閑説箇所。本書には多大の示唆を得た。

癡鈍が景德寺に入院した時期やその行実などを記した直接的史料はない。『増集續伝灯錄』卷一には、「上堂」語二種と「偈」二句を所載するが、いつどこにおいてなされたものかは手がかりがなく不明である。なお『五燈会元統略』『統燈存藁』『寺志』には、同一の「頌」（達磨見武帝因縁）一首が所載している。これらの典拠についても不明である。

癡鈍の景德寺世代に關し、『統志』には『枯崖和尚漫錄』卷下に所載する法嗣南翁明△生沒年不詳△の「行狀」を引き、世代順で前志（『寺志』）が癡鈍を浙翁の前へ列しているのは誤りであるとしている。その該當箇所を次に示そう。

(南翁明)嘗宿_ニ天台石橋_ニ遇_ニ異僧_ニ指令_ニ其見_ニ老仏心翁_ニ（浙翁如琰）至_ニ太白_ニ投_ニ誠預_ニ其法席_ニ。然室中纔開_レ口便被_レ叱_レ。私自念曰、今生不了則有_ニ來生_ニ已而泪下交_レ顧_ニ。後在_ニ癡鈍會中_ニ為_ニ侍者_ニ。（以下略）

し、臨濟宗楊岐派に屬す。

『増集續伝灯錄』卷一によれば、癡鈍は初め茶陵郡（湖南省長沙府）嚴福寺に出世、後に金陵（江蘇省）保寧寺、蔣山（同上）、紹興（浙江省）報恩寺、蘇州（江蘇省）靈巖寺へ移遷、再び蔣山に住し、さらに四明（浙江省）雪竇山、そして天童山へ入院している。

癡鈍が景德寺に入院した時期やその行実などを記した直接的史料はない。『増集續伝灯錄』卷一には、「上堂」語二種と「偈」二句を所載するが、いつどこにおいてなされたものかは手がかりがなく不明である。なお『五燈会元統略』『統燈存藁』『寺志』には、同一の「頌」（達磨見武帝因縁）一首が所載している。これらの典拠についても不明である。

癡鈍の景德寺世代に關し、『統志』には『枯崖和尚漫錄』卷下に所載する法嗣南翁明△生沒年不詳△の「行狀」を引き、世代順で前志（『寺志』）が癡鈍を浙翁の前へ列しているのは誤りであるとしている。その該當箇所を次に示そう。

(南翁明)嘗宿_ニ天台石橋_ニ遇_ニ異僧_ニ指令_ニ其見_ニ老仏心翁_ニ（浙翁如琰）至_ニ太白_ニ投_ニ誠預_ニ其法席_ニ。然室中纔開_レ口便被_レ叱_レ。私自念曰、今生不了則有_ニ來生_ニ已而泪下交_レ顧_ニ。後在_ニ癡鈍會中_ニ為_ニ侍者_ニ。（以下略）

南翁が太白（名山天童景德寺）において初め浙翁に師事したが機縁かなわず、後に痴鈍の会下において侍者となり遂に契当したことと述べる中に、その景德寺住持は浙翁の後に痴鈍がなつていることを明示する史料としたのである。この『続志』の主張は、ほど妥当といえる。

癡鈍には、徑山の荊叟如珪、震峰の大夢徳因、虎丘の不伝務本、光孝の伊庵（伊巖とも）玉、南翁明・祖賢の六人の法嗣がいる。

○癡鈍史料

- (1) 『枯崖和尚漫録』卷下「續藏一四八、八七a」に法嗣の伊巖玉へ生没年不詳との機縁が所載。伊巖の名は『増集続灯録』卷一の目録「續藏一四二、三六六a」には伊庵となつていて、その伊巖が雪竇山住持時代の癡鈍に相見し三年目にして明得した話が中心である。前掲書卷下「同八七b～c」には門下の東山源へ生没年不詳には、靈巖寺（蘇州）在住時代の癡鈍との機縁、「同八七d」にも門下の隆首座（号、南山叟）へ生没年不詳との機縁、「同九〇c～d」には法嗣荊叟珪へ生没年不詳との機縁、「同九二a～b」には本文中にも引用した法

嗣南翁明へ生没年不詳との機縁、同じく「同七九d」に祖賢首座との機縁が所載。

- (2) 『増集続伝灯録』卷一「續藏一四二、三八三b～c」「四明天童癡鈍智顥禪師」冒頭に諸山（金陵・蔣山・紹興・蘇州・再住蔣山・雪竇・天童）の移遷、その後に「上堂」語二種と「偈」二句が所載。なお「同書卷二、三六六a」の目録に法嗣として「徑山荊叟如珪禪師」「雪峰大夢徳因禪師」「虎丘不伝務本禪師」「光孝伊庵玉禪師」「南翁明」の五人を掲げるが、前二者を除き後二者は無伝。

- (3) 『続伝灯録』卷三四「正藏五一、七〇一a」「天童智顥禪師」或庵の法嗣三人中の一人として名のみを記している。

- (4) 『五灯会元続略』卷三「續藏一三八、四五一b」「慶元府天童癡鈍智顥禪師」「達磨見武帝因縁」の頌一首のみ。

- (5) 『続灯存稟』卷一「續藏一四五、一九d」「明州天童癡鈍智顥禪師」(4)に同じ。

- (6) 『五灯全書』卷四七「續藏一四一、三七a」「慶元府天童癡鈍智顥禪師」(4)に同じ。

(7) 『寺志』卷三「二〇六」には癡鈍の法系を略記、卷六

〔四二五〕には(4)(5)と同じ「頌」一首。

(8) 『続志』卷上「一六丁表」「決疑」として「南翁明行状云、明參太白浙翁琰、後於師会中、得獲印可、前志列師於浙翁琰前誤矣」とあり、『枯崖和尚漫錄』卷下「續藏一四八、九二a～b」の文を元に論じている。

(9) 癡鈍の門人の一人として『枯崖和尚漫錄』卷中「續藏一

「大道之源」話に触発されたことを伝えている。

四八、八二a】には、浙翁如琰の法嗣東山道源が癡鈍の

海門師齊

出自・俗姓は不明。剃髪・受具の時期や参考師なども未詳。拙庵(仏照)徳光△一一二一～一二〇三▽の法嗣。無際△派△一一四九～一二二四▽・浙翁如琰△一一五一～一二二五▽・北礪(敬叟)居簡△一一六四～一二四六▽等と同門。海門との法兄弟関係も不明。臨濟宗楊岐派中の大慧下に属す。

『増集続伝灯録』卷一には、台州瑞巖寺に住していた際、勅旨を賜り(天童)景德寺へ昇住したという。その際、「華嚴大菩薩」の再生とされる逸話を伝えている。その話は、

『続灯存稟』卷一や『寺志』卷三にも所載するが、いずれもその年時を記していない。

何ら手がかりとなる史料がないため『続志』には、その列位も後考を俟つかないとしている。没年も不明であるが、『寺志』卷七によれば、その塔は西崖の弁山禪師塔の南に建てられていた。法嗣の人名や人数も不明である。

○海門史料

(1) 『増集続伝灯録』卷一「續藏一四二、三七六b」「四明

天童海門師齊禪師」海門が天童景德寺へ入院した際の逸話は次の通り。「有童行曰、捧香合隨師、各殿堂行

香及畢、回方丈仏前、師白仏云、晨朝誦大方広仏華嚴經一部、回向真如云云、蓋師出方丈門時、誦世主妙嚴品起回方丈、已誦畢。其童行對衆僧說如上事、衆皆不信。師云、汝等八十一人各執經一卷、老僧於法座上誦。衆僧依命師誦一卷畢。其八十一人各聞自手執經誦畢。衆疑方釈、知師是華嚴大菩薩再生者也」

(2) 『続伝灯録』卷三四「正藏五一、七〇五c」「天童齊禪師」名のみにて伝記は無録。

(3) 『続灯存稟』卷一「續藏一四五、一七b」(1)の逸話を

略述。

(4)『五灯全書』卷四七〔続藏一四一、三四c～d〕「明州

天童海門師齊禪師」(1)の略述。

(5)『続志』卷三〔二〇六～七〕には「補略」として冒頭に嗣承関係と(1)の逸話の略述。卷七〔四九三〕には「海門齊禪師塔」の位置に関する記述。

(6)『続志』卷上〔一五丁裏〕天童景德寺の入院年月を知る記録がなく、従つてその住持位次も不明である筈であるが、息庵達觀と無用淨全との間に列している。その根拠は不明。

雪庵從瑾へ一一七～一二〇〇▽

浙江省永嘉県南渓の人、俗姓は鄭氏。初め(十四歳)普安院の子回(伝未詳)を礼し得度、さらに台州万年寺の心聞曇

院へ生没年不詳△に参じ、その後、台州瑞巖寺において心聞院に嗣法した。心聞は育王寺の無示介謹へ一〇八〇～一一四八△の法嗣で慈航了朴へ*～一一八三△とは法兄弟の関係にあり、臨濟宗黃龍派に属す。なお『五灯会元続略』卷一・『五灯嚴灯』『繼灯錄』『五灯全書』には、天童如淨へ一一六三～一二二八△の法嗣として鹿門自覺へ*～一一七△の後

に附しているが共に誤りである。鹿門は芙蓉道楷へ一〇四三～一一一八△の法嗣である。

雪庵の嗣法後の行実として『増集続伝灯錄』卷一には、福建省寿山の西禪寺の仏智端裕へ一〇八五～一五〇△に相見したこと述べている。また『続志』卷上には『兩浙名賢錄』(筆者未見)を引用し、次の如く述べている。師の心聞が江寧府(江蘇省)長蘆寺に住した際に分座接納したこと、

次に史浩(『祭足庵鑑禪師文』撰者、紹興の進士、国子博士)が心聞より門下の雪庵の英俊なることを知らされ雪庵を請して象山(浙江省勤県か、江蘇省江寧県か不明)香燈院に住せしめたこと、後に雪庵は天童山・雪竇山(浙江省奉化県)へ移ったがそれらの住院は三年を過ぎることがなかつたとし、鹿園庵(不詳)に退居して晩年には再び出世しなかつたことを伝えている。

住院に関して『寺志』卷三の「補伝」には、初めに儀真(江蘇省)靈巖寺に住し、後に景德寺へ入院したとだけ述べている。前掲の象山香燈院と雪竇山の入院についての史料は他にない。『続志』卷上には、雪庵の法嗣虛庵懷敞へ生没年不詳△が淳熙十六年(一一八九)に天台万年寺より来て(天童)景德寺に住したことを樓鑰へ一一三七～一二一三△の撰

『千仏閣記』中の文によつて確かめて、その住持期間は結局淳熙年間へ一九三と一二〇〇▽だけのことと推測している。前述の『兩浙名賢錄』の記事が事実とすれば、雪庵の入院は恐らく前住の密庵の寂後、淳熙十三年(一一八六)六月以降の同年中であり、それから虚庵の入院する淳熙十六年までの約三年の期間となろうか。その後に雪竇山へ移り、鹿園庵に退居したのであろう。なお、樓鑰と雪庵とは交流があつたらしく『攻媿集』卷八十一には「雪竇瑾老贊」がある。

前後するが、雪庵の天童景德寺における行実は不明である。「上堂」語として『増集續伝灯錄』卷一ないし『寺志』卷六に所載するものを次に掲げておきたい。

金剛圈裏翻_レ身、築_ニ著帝釈鼻孔_レ、懸崖頭上撒_レ手、突_ニ出達磨眼睛_レ、往復三回興猶未_レ尽、機輪一転勢不可_レ停、倒拈_ニ蝎尾_レ、婢使_ニ声聞_レ順持_ニ虎須_レ、奴呼_ニ菩薩_レ釈迦已滅_レ、弥勒未_レ生仏法祖令、総屬_ニ天童_レ把住放行_レ。如何施設、良久。無孔鉄槌當面擲、普天匝地起_ニ清風。

『増集續伝灯錄』卷一によれば、慶元六年(一一〇〇)七月二十三日、浴を_{もと}索め衣を更え、遺偈を書し筆を投げて逝去したという。しかし、その遺偈は不明である。年寿八十四歳、

法臘七十年。全身を台州万年寺の本師心聞禪師塔の左傍に葬塔された。法嗣には前述の虛庵懷敞が知られる。

○雪庵史料

(1)『雪庵從瑾頌古集』〔続藏一二〇、一六八c~一七〇a、禪宗集成一四一九四九四一七〕 これには、伝記上の史料となるものは何もないが、思想を探る上では役に立つであろう。

(2)『増集續伝灯錄』卷一〔続藏一四二、三八二d~三a〕

「四明天童雪庵從瑾禪師」 前半の略伝には、受業師子回、本師心聞曇貢・參學師仏智端裕との機縁などを記す。また「初住_ニ儀真靈巖」とあり、『寺志』卷三はこれに依拠する。後半にはある僧との問答話、「上堂」語二種、末尾に示寂に關することを記す。

(3)『續伝灯錄』卷三四「目錄」〔正藏五一、七〇〇c〕

万年賁禪師法嗣四人中の一人として名を挙げているが伝記は無録。

(4)『五灯会元續略』卷一〔続藏一三八、四二七a〕 本文に述べたように如淨の法嗣とする誤りを犯している。(1)に所收する末尾の「五祖演曰、倩女離魂、那介是真底」

の頌を一僧の問い合わせとして所載する。

(5)『続灯存稟』卷一「続藏一四五、二一a」「明州天童雪庵徳瑾禪師」(2)と大同小異である。ただし末尾は「全身葬心聞塔右」とあり、(2)の「左」とは異なる。因みに『寺志』卷七では「葬全身(中略)心聞賛禪師塔傍」、同卷三では「右」とあって各々異なる。

(6)『五灯全書』卷四〇「続藏一四五、四六四d~五b」「明州天童雪庵徳瑾禪師」(2)(5)に同じ。

(7)『寺志』卷三「三〇三~四」「補伝」としてその略伝を記す。(2)(5)に拠つたものと思われる。卷六「四二三~四」には「上堂」語一種と附録として「了庵欲禪師和雪庵瑾和尚偈」を所載する。了庵清欲へ一二八八~一三六三▽は、雪巖寺に住しているので、その縁で偈を作ったのであろう。卷七「四九二~三」には「雪庵瑾禪師塔」に関する記事を所載。

(8)『続志』卷上「一四丁裏~一五丁表」本文に記す通り。

(9)『攻媿集』卷八一「七四七a」に「雪庵瑾老贊」がある。それは「俊弁不窮靈台無比、庵空無人雪消成水、若道成水流転未已、一点洪爐永超生死」という

ものであり、樓鑰と交流があつたことを知る。なお同書卷一一〇「一〇八七b」の「瑞巖谷庵禪師塔銘」の谷庵は慈航の項で記した如く雪庵の法兄に当り、その塔銘の文中にも雪庵の名が見える。また雪庵が退居した「鹿園庵」の鹿園の字も同じく塔銘の文中にあり、何らかの関係があると思われる。

(10)『黃龍十世錄』「五山文学新集卷三、二〇六」示寂の際、次の遺偈を天童山の松石上に書したという。「山川有限死無窮、死後深埋向此中、我亦不知誰是我、觸體日夜聽松風」本書には、その後に延寿海上人よりの求められた頌を附すが、いずれもその典拠は不明。

虚庵懷敞(敵)

虚庵の出自や修行遍歴を記す史料はないが、その本師は既述の通り雪庵徳瑾へ一一七~一二〇〇▽である。虚庵の実は、日本の栄西へ一一四一~一二一五▽との関係文献以外、ほとんど不明である。すなわち栄西の入宋と嗣法等を記した『興禪護國論』や『元亨釈書(栄西伝)』『塔銘』また天童山景德寺の千仏閣建立の記録(樓鑰撰『天童山千仏閣記』、虞樗撰『日本国千光法師祠堂記』)である。

『興禪護國論』巻中によれば、栄西が再度の入宋を遂げたのは文治三年（中国淳熙十四年へ一一八七）春三月であり、初め臨安府の安撫侍郎に入笠を申請したが許可されず、そこで天台山に登り万年寺に住して、いた虚庵に師事した、とある。その後、虚庵が景德寺へ転住した際（淳熙十六年正月）

にも随侍して紹熙二年（一一九二）遂に嗣法し（臨濟宗黃龍派）、その秋に帰朝している。帰朝に当り虚庵は栄西のために送別の辞ともいべき文を書し、信衣（僧伽梨）・拄杖・應量器や他の弁道の道具などを与えている。なお嗣法の直後に「伝法偈」や大小兼受の菩薩戒も授けている。栄西は帰朝に臨み、景德寺千仏閣の改築につき日本から良材を送ることを約束し、二年後の紹熙四年秋、立派にそれを果し完工された。千仏閣の規模は「七間、高為三層、棟横十有四丈、其高十有二丈、深八十四尺、衆楹俱三十有五尺、外開三門、上為藻井、井而上十有四尺、為虎座大木交貫、堅緻壯密牢不可拔上層、又高七丈拳千仏居之位置云々」とある。虚庵は栄西の力量を評価し、樓鑰にその記を申請したのである。これらの記事によって紹熙四年に千仏閣を重建した當時、虚庵が在住していたことは確実であるが、その後、いつまで住院していたか、さらにいつ示寂したのかも不明である。法嗣も数人い

たと思われるが、栄西一人だけが知られる。『寺志』巻七には、虚庵の塔は新庵の後にあるとし、栄西の「礼塔偈」が所載する。しかしこれは『寺志』巻五において栄西が虚庵を万年寺に訪ねた時の詩偈として所載するものであり、「礼塔偈」とは言えない。

虚庵の天童山景德寺住持に關し、『扶桑五山記』（天童寺住持位次）には、「二十二雪庵瑾（従瑾）禪師」に続いて「廿三虛庵徹（マコ）禪師」とある。『寺志』巻三「集略」では、「師諱懷敵紹熙間、自天台万年来主天童、隨侍有日本國僧栄西」とあり、その後の「正誤」の欄に「旧志誤紹熙為淳熙、列師千弁山阡之後」としているが、この記事について『寺志』の年号の方が誤りであり、旧志（五巻本『天童寺志（壬申志）』）の方が正しい。但し、その旧志が弁山阡の後に列するのは問題である。『続志』では、樓鑰の「千仏閣記」の文によつて虚庵が天童山の主となつたのは淳熙十六年とし、紹熙四年に千仏閣を重建したとし、雪庵の前に列している。

『扶桑五山記』の虚庵に續く「廿四節禪師」の節に關しては全く不明である。

○虚庵史料

(1) 栄西撰『興禪護國論』卷中〔正藏八〇、一〇b-c〕

〔第五宗源正臘門者〕の第五十二嗣祖師・第五十三第西の項に崇西が再度入宋し、淳熙十四年、天台山に登り万年寺の虚庵に相見、參禪問道して遂に嗣法、紹熙二年七月帰國の際、別れに臨み書した文が所載する。「日本国千光院大法師。西宿有靈骨。頓捨世間深重恩愛。從仏剃髮著僧伽梨。洪持此法。不遠万里。航海而入我炎宋。探赜宗旨。乾道戊子歲。遊天台。見山山川土勝妙。道場清淨殊特。生大歡喜。嘗施淨財。洪十方學般若菩薩。已而至石橋。拈香煎茶。敬禮住世五百大阿羅漢。尋復本國。夢境恰恰二十年。雖音問不相聞。而山中老宿。歷歷記其事。今又懷旧遊復之。宿緣不淺志懶。茲深。不可不示法旨。夫昔釈迦老人。將欲円寂時。以涅槃妙心。正法眼藏。付屬摩訶迦葉。乃至嫡嫡相承至於予。今以此法付屬汝。汝當護持。佩其祖印。帰國布化。未生。開示衆生。以繼正法之命。又授汝袈裟。大師昔伝衣為法信。而表本来無物。然至六祖。衣止不伝。云々。其風雖絕。今為外國法信。授汝僧伽梨而已。又授菩薩戒。拄杖。忢器。衲子道具。不留一付屬畢。聞伝法偈。云々」文中末尾の「伝法偈」は、(5)『黃龍十世錄』に後出する。『興禪護國論』

序の識者高峰東駿へ一七一四(一七一九)も序文中に栄西の入宋に関して若干触れている。

(2) 横鑑撰『天童山千仏閣記』〔-〕『攻媿集』卷五七一五二八b～五三〇a、(2)『寺志』卷二一八八(九二) (2)の冒頭には「光宗紹熙四年癸丑虛庵禪師懷敞重建千仏閣日本千光師栄西航巨木来佐」とある。

(3) 虞樗撰『日本國千光法師祠堂記』〔続群書類從卷二二五、
二七三〕 これには「太白名山甲天下。而千仏閣尤為第一。後世欲過之。其材無及焉。蓋柱植繇日本國僧千光法師所致也。詳見太參樓公閣記。宜為画像以祠。師諱栄西。(中略) 誓往西域求道。二十八航海達四明。遊台山。萬年寺。礼石橋羅漢。淪茶現花。又見二青竜。俄頃尊者現全身。益堅素志。遂居之。会虛庵敝(マヤ)公移主天童。因与偕行。及建閣。即東還。願有以助之。越二載。大木果至而閣成。師之力也」とあり、また栄西の略伝の後に「後十年。其從明全復來山中。損楮券千緒。寄諸庫。転息為七月五日忌設冥飯。衆本孝也。(後略)」とある。この記は、その明全の示寂した宝慶元年(一二一五)八月九日に撰したもので道元禪師が在宋中のことである。

(4)『元亨釈書』卷二〔大日本佛教全書第六二卷—史伝部

一、七五〇～七七〇」「建仁寺榮西」伝 (1)に記した虚庵が別れに臨み書した文を簡略化し多少の文字を変えている。

(5)『黃竜十世錄』〔五山文學新集卷三、二〇七～九〕至

治元年(一一三二)洞山大用△伝來詳▽の書になる虚庵の人物評価や略伝、「上堂」語、「拈頌」(為天台明上人拈出)、黃竜山住持山翁宗廓△伝未詳▽が元統二年(一一三三)冬に書した文があり、その後に虚庵が榮西に与えた伝法偈「偈寄千光法師」が所載する。それは「不露鋒銳意已彰、揚眉早墮識情鄉、著衣喫飯自成現、打瓦鑽龜空着忙、若信師姑元女子、無疑日本即南唐、一天月色澄江上、底意分明不覆藏」というものである。本書はこの直後(一一〇～一二四)に「日本國京師東山建仁千光禪師榮西」伝を所載する。

(6)『洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘』(永樂

二年、錢塘上天竺講寺前住如蘭撰)「續群書類從卷二二五、二七四～七」この銘文中に「万年寺欽三門兩廡、師捨芝券三百万挙二役。(中略)又修觀音兩大悲寺智者塔院」とある。

(7)『寺志』卷二「八八～九二」に樓鑰の「天童山千仏閣

記」、卷三「一一一」に「集略」(略伝)、卷五「三四三～四」に千光(榮)西との機縁、卷七「四九三」に「虛庵敏禪師塔」の記事(榮西の礼塔偈の問題は本文に指摘)が所載する。

(8)『続志』卷上「一五丁表」樓鑰撰「千仏閣記」中の記事により虚庵の天童山入院年と千仏閣の重建年を示すだけ。

(9)「授理觀戒脈奧書」「授覺心戒脈奧書」「天久保道舟編『道元禪師全集』卷下、二九〇～一」この両奥書に「東林^{アマ}敏和尚在^ニ天台^ニ日、於^ニ維摩室^ニ示曰、菩薩戒禪門一大事因縁、汝航海來問^ニ禪於予、因先授^ニ此戒・法衣・應器・座具・宝瓶・拄杖・白払、不^レ遺^ニ一物^ニ授畢。于時大宋淳熙己酉歲九月望日、懷敏記」とある。これは前掲(1)の史料の文中に相応する箇所がある。

無用淨全△一一三七～一二〇七▽

越州(浙江省)暨陽の人、俗姓は翁氏 無用は自号。初め(二十六歳の頃)大悲山神弁(不詳)に従い出家得度し、徑山能仁禪院(後の興聖万寿寺)に住して大慧宗杲△一〇八九～一一六三▽に参じて嗣法している。同門の左学士錢象

祖の撰『塔銘序』によれば大慧の寂後、無用は諸方に遍参、靈隱寺の拙庵徳光へ一二一〇三の下では典賓（知客）を勤め、淨慈寺の混源曇密へ一二〇〇一八八の下では半坐説法している。拙庵・混源の二人は、いずれも大慧の法嗣で無用の法兄に当る。

淳熙十六年（一一八五）、尚書尤公と襄宝文王公によつて狼山（江蘇省南通県）に請され開法しているが、その寺院名は記していない。さらに蘇州の承天寺・宣城（安徽省蕪湖県）の廣教寺・建業（建康）の保寧寺に移錫し、この中、保寧寺に住したという。偶たま天童山景德寺が虚席になり、無用が迎えられたとあるが、その入院年月は記していない。

『五灯会元』卷二十と『続伝灯錄』卷三十二、それに『寺志』卷六に所載する「上堂」語中、どれが天童山景德寺のものか不明であるが、「天童」の字が見えるものを次に掲げよう。これは靈隱寺に至つた際、大衆の要請によつて「上堂」したものである。

靈山正派達者、猶迷明來暗來。誰當弁的、双収双放、誰弁端倪。直饒千聖出來、也祇結舌有分。何故人帰國。方為貴水到瀟湘始是清。復曰適來松源和尚拳竹籠話令天童納敗歛。諸人要知麼。聽取一頌、黑漆竹籠握

起迅雷不及掩耳。德山臨濟茫然懵底如何挿嘴。

『寺志』卷八に陸游の「無用禪師語錄序」が所載し、『攻媿集』卷八一に「書全無用語錄」が記されているように無用の語錄もあつたようであるが、その存亡は不明である。

開禧三年（一一〇七）六月二十九日、偈を説き遷化した。世寿七十一、法臘四十五年。全身を寺の西麓の応庵の塔と対峙して建塔し、ために「双塔」と称された。

法嗣には、笑翁妙堪（一一七七～一二四八）・石鼓希夷（生没年不詳）・盤山思卓（同上）などがいる。なお『如淨語錄』讚仏祖の項に「無用頂相」が所載するよう、如淨（一一六三～一二二八）は無用の下に参じ、また石鼓は如淨に参じ、盤山には後に道元が台州小翠巖に赴き参じたとされている。そうとすれば正しき奇しき因縁である。

○無用史料

(1) 左学士錢象祖撰『塔銘序』〔寺志卷七、四八九～四九二〕

錢象祖は大慧の印可を受け、また左丞相にまで上つた人。〔宋史、三八五〕〔宋元学案、九七〕参照。

(2) 『五灯会元』卷二〔續藏一三八、三九八c～d〕〔慶元府天童無用淨全禪師〕冒頭の「上堂」語三種は、どこの

ものか不明。次の二種は靈隱寺のものと思われる。その後に師大慧との問答話を附す。

- (3) 『禪宗正脈』卷一〇〔續藏一四六、一七六b〕「天童無用全禪師」(2)の冒頭の「上堂」語一種のみ。
- (4) 『続伝灯錄』卷三二〔正藏五一、六八九b~c〕「慶元府天童無用淨全禪師」(2)に同じ。
- (5) 『五灯嚴燈』卷二〇〔續藏一三九、四四五d~六a〕「慶元府天童無用淨全禪師」(2)(4)に同じ。
- (6) 『五燈全書』卷四五〔續藏一四一、一二b~c〕「慶元府天童無用淨全禪師」(2)を多少整理したもの。
- (7) 『寺志』卷六〔四一七~九〕(1)(4)(5)の冒頭の「上堂」語一種と「到靈隱請上堂」語、その後に「頌」(維摩詰默然無言)を附す。末尾の「頌」の典拠は不明。卷七〔四八九~四九二〕錢象祖撰『無用全禪塔銘』(1)に同じ。卷八〔五六四〕に陸游撰『無用禪師語錄序』があり、無用に『語錄』が存したことを示す。(9)参照。
- (8) 『續志』卷上〔一五丁裏〕に(1)の『塔銘』の文を抜萃し、「二十五代住持」を称したという。
- (9) 『靈隱寺志』卷三下〔中國仏寺史志彙刊一一二三、一七二~三〕「無用淨全禪師」(2)(4)(5)の「到靈隱請上堂(師

一至靈隱衆請上堂」語を転載。

- (10) 『攻媿集』卷八一〔七五一a〕に「書全無用語錄」が所載する。樓鑰と無用とが交渉のあつたことを表す。次にその語を引く。「全公無用、無用之用、生前已自無用、死後葛藤何用。雖然如是善用者、必自有用、不善用者、不如勿用。試問、大衆如何則為善用、有時拈起一枝草作丈六全身、有時把丈六全身却作一枝草用」

- (11) 『枯崖和尚漫錄』卷上〔續藏一四八、七七c~d〕に法嗣の笑翁妙堪が太白名山天童景德寺に至った時の問答話がある。それは「笑翁堪禪師初遊方抵明之太白、無用問曰、汝行脚僧耶遊山僧耶。曰行脚。又問如何是行脚事。翁以坐具搘之。無用曰、此僧敢捋虎鬚參堂去。一日室中拳狗子無仞性話擬開口。無用起拳竹篦。翁應声曰、大荼毒蟲天震地轉。腦回頭橫屍万里。無用然之、翁平生未嘗以言狗物以色返死」というものである。また笑翁が行乞中、洛陽郊外を山行し下生院(不詳)に至り、そこで嘗て無用に相見した一老僧と邂逅した話を同書卷中〔八五c〕に所載している。さらに同上〔八五a〕に山陰清首座(伝不詳)が心法を無用に得て「椒頌」を作っている。この清首座は無用の法嗣か

どうかは不明である。

(12)『如淨語錄』讚仏祖「無用頂相」「正藏四八、一三一b」

他の諸種の異本にも所載。

(13)鏡島元隆著『天童如淨禪師の研究』「七三」に『寺志』

卷三を史料とし、無用の天童山入院を淳熙十六年にされ
ているが『寺志』卷七の『塔銘』を史料とするべきであ
り、その箇所に入院年月は記していない。なお淳熙十六
年には虚庵が入院している(『天童山千仏閣記』)ことは
既に記した。

(14)『糸氏稽古略』卷四〔正藏四九、九〇一c〕 法嗣の笑

翁妙堪の略伝中に閑説。

(15)『枯崖和尚漫録』卷中〔続藏一四八、八一a〕に拙庵

(仏照)徳光の法嗣秀巖師瑞が松源崇岳と無用と共に木
庵安永へ*へ一七三▽を尋訪したことを伝え、彼等と
の道交を知ることができる。

息庵達観へ一二三八へ一二一二▽

婺州(浙江省)義烏の人、俗姓は趙氏。「天童山息庵禪師

塔銘」(『北磵集』卷一〇)によれば、十二歳で法惠寺の正覚
へ^{伝未詳}について受業し、遍歴中、景德寺の応庵曇華へ一

一〇三へ一六三▽に参じ、次に湖州(浙江省吳興県)道場
寺の無庵法全へ生没年未詳▽に謁し、遂に台州天封寺の水庵
師へ一一〇七へ一七六▽の室内に入り嗣法した。従つて
臨濟宗楊岐派に属す。

その後、温州(浙江省永嘉県)龍翔寺の柏堂南雅へ生没年
未詳▽の下で分座説法し、さらに嚴州(浙江省建德県)靈巖
寺にて開法している。柏堂との道交のいきさつは不明だが相
当に深いことが知られる。それから四、五刹を経て晩年に至
り「金山(江蘇省)より靈隱寺へ請され入院して四夏、それ
から景德寺へ転住して六夏」というが、いずれの寺院にもそ
の止住年代を明記していない。息庵の景德寺入院を無用の寂
後とすれば、開禧三年(一一〇七)六月以後となろう。

『寺志』卷六に所載する「上堂」語は、あたかも景德寺の
もののようにしてあるが、『増集續伝灯錄』卷一によれば、
「被旨居ニ靈隱」の直後の文にあるものであり、果して景德
寺入院のものであるか疑問が残る。なお息庵の「示衆」
「頌」が『五灯会元統略』卷三に所載し、それが『寺志』卷
六や『続灯存藁』卷一などに転載されているのである。
『續志』卷上「補訂」には、息庵の主席時代における景德
寺の事蹟を証する依拠はないが、天童(山景德)寺へ勅住し

ているとし、宣獻公「樓鑰」へ「一三七」、「一二三」▽が「疏」(不明)。『攻媿集』五卷の中に息庵と樓鑰を結ぶ文は見当らない。但し『天童山千仏閣記』の末尾近くに『統志』の文に相応する語がある。)を撰し、息庵の住持當時、樓鑰は在世していた、という。しかしこの記事はどうも要領を得ない。

恐らく虚庵の記事が紛れたものと思われる。

息庵の入院は、恐らく開禧三年六月以後の比較的早い時期のこととでそれから示寂までの「六夏」とすれば数字上では問題がない。

嘉定五年(一一二二)七月二十七日示寂、法臘五十、年寿七十五。龕に留めること七日、全身を玲瓈岩の下に奉じて塔を建てた。得度せしめた者は九十七人である。また法嗣には、虛丘善濟・天衣文蔚・華藏善淨・柏巖凝・復川など八人がいる。その中、華藏の法嗣西江広謀がいて、後に景德寺へ入院している。

○息庵史料

(1) 敬叟居簡(北磧和尚)撰「天童山息庵禪師塔銘」〔北磧集〕卷一〇(欽定四庫全書、集部四所収)、五a～六a
撰者の敬叟は仏照德光の法嗣であり、『北磧集』には、

師仏照をはじめ無外義遠(卷五)、痴絶道冲(卷六)、芙蓉道楷(同上)等のなじみ深い禅者の諸史料がある。卷九〔二五a～二六b〕に「祥後堂住天童疏」と「印老住天童州府山門諸山三疏」があるが、その祥後堂や印老は伝未詳である。

(2) 『増集統伝灯錄』卷一〔統藏一四二、三八二a〕「四明天童息庵達觀禪師」(1)で「後于天封水庵室中明得二老垂手處瓣香為水庵有自也、水庵在閩横機峻峭為衲子一閑徑往扣之一語不浪不破的而後返」とある個所を本書は「後於天封水庵室中明得二老垂手處木庵在閩機用峻峭為衲子一閑徑往扣之一語破的而返」とある。文中(1)の水庵か、本書(2)の木庵か、問題になろう。なお『寺志』卷三では「木庵永禪師在閩機用峻峭云云」となり、水庵師一ではなく木庵安永へ*へ一七三▽になつてゐるのである。

(3) 『統伝灯錄』卷三四〔正藏五一、七〇〇c〕「淨慈水

庵一禪師法嗣四人」の一人として「息庵達觀禪師」の名だけで伝記は所載していない。

(4) 『五灯会元統略』卷三〔統藏一三八、四五一c～d〕
「慶元府天童息庵達觀禪師」伝記となる記事はなく

「示衆」一種を所載。

(5) 『続灯存藁』卷一 「続藏一四五、一九b」「明州天童息庵達觀禪師」 (1)の略伝、(2)の誤記はない。

(6) 『五灯全書』卷四七 「続藏一四一、三六a~b」「慶元府天童息庵達觀禪師」 冒頭に略伝を記載、比較的よくまとまっている。

(7) 『寺志』卷三 「二〇五」 (2)に既に記した通り、(1)とは部分的に相違する。卷六 「四二四~五」には、(2)(5)の「上堂」語と(4)の「示衆」を所載する。

(8) 『続志』卷上 「一五丁表」 本文に述べた通り、恐らく虚庵の項に置くべき記事と思われる。ここに「師住持當在公、奉祠東帰之時」とあるのは、『天童山千仏閣記』の末尾近くの「鑰奉祠東帰嘗往遊焉。驚嘆傑特目眩神駭過干耳聞。敵謂記其事老矣」に相応する。

(9) 『扶桑五山記』卷一 「靈隱住持位次」「玉村竹二校訂本、二六」では「廿五 息庵^(達觀)禪師」とあり、靈隱寺二五代の住持となっている。なお『靈隱寺志』「中國仏寺史志彙刊一~二三」卷三上下「住持禪祖一、二」等に息庵に関する記事は何も所載しない。

(10) 『枯崖和尚漫錄』卷中 「続藏一四八、八一a」には、息

庵の法嗣巖凝との機縁、同じく「八六c」には虎丘善濟との機縁の記事が所載する。

無際了派△一一四九~一二二四▽

建安（福建省）の人、俗姓は張氏。受業得度の年齢や受業師などは不明、受具足戒は二十四歳。『枯崖和尚漫錄』卷上によれば、初め密庵咸傑△一一八〇~一一八六▽の法席に参じたことがある、という。その後、育王山の拙庵（仏照）徳光△一一二一~一二〇三▽に嗣法。浙翁如琰△一五一~一二二五▽や海門師齊△生没年不詳▽などと同門の法兄弟である。臨濟宗楊岐派中の大慧下に属す。

『枯崖和尚漫錄』卷上に拠れば、慶元四年（一一九八）常州（江蘇省）保安寺にて開法し、嘉定年間（一二〇八~一二二四）中に天童山に住していたことが知られる。しかし、その入院は、前住の名や退院の時期も不明であるので「上堂」語と共に判らない。『増集続伝灯錄』卷一には、五種の「上堂」語を所載するが、それらのいずれも天童山のものとする手懸りはない。『寺志』卷三には、その中の二種を転載している。

嘉定十六年（一二三三）七月、道元禪師が天童山景德寺に掛錫した当時、住持は無際であった。『正法眼藏』嗣書には、

翌十七年正月二十一日、智庚という僧によつて無際の「嗣書」を拝覧していることが記されている。その「嗣書」の冒頭に「了派蔵主者、威武人也、今吾子也」とあって、無際が育王山において蔵主職を勤めていたこと、また拙庵より無際は「威武人」とある如く非常に勇ましく力のある人と見做されていたことが判る。

天童山における止住期間やその行実は不明である。なお道元禅師の伝記中、『三祖行業記』『三代尊行状記』には、「初見_ニ派無際、問_レ道求_ニ法、雖_レ及_ニ嗣書拝看、未_レ決_ニ择大事」⁽¹⁾とあるが、『訂補建撕記』には、「宝慶元年乙酉・日本嘉禄元年、師天童ニ寓シテ・マサニ・二歳ニ近シ・無際ノ許可ヲ蒙ルコト・数回ナリトイヘドモ・自ラコレヲ肯ヒ玉ハズ」とあり、二人の機縁が実らなかつたことを伝えている。必ずしも史実通りではないが一面の真実を反映しているといえよう。

なお無際の師拙庵と道元禅師の師如浄とは親交があつたようであるが、『正法眼蔵』行持下に拠れば、如浄は拙庵に対し「仏照ことに仏法の機關をしらず、ひとへに貪名愛利のみなり。(中略) いま諸方長老無道心なる、ただ光仏照箇児子也、(中略) 仏照児孫、おほくきくものあれどうらみず」とあるように、無際やその児孫に対しあまりよい印象を持つて

いなかつたことが推定される。

『枯崖和尚漫録』卷上には、「退院上堂」語が所載し、『統志』卷上にもそれを引用している。それは次の通りである。
〔示_ニ疾辭_ニ衆上堂云〕 十方無壁落、四面亦無門、淨躰躰、赤洒洒、沒_レ可_レ把。喝一喝元、機度買未還自壳、為憐_ニ松竹_ニ引_ニ清風。「下座入_ニ丈室、端坐泊然而化。」

この記事に拠れば、無際は何かの疾病を生じ、おのれの最期を知りて大衆に辞世の語を残し坐亡したことが知られる。

嘉定十七年春(四月前)の示寂と推定されている。年寿七十六歳、法臘五十二年、無際の「遺書」は、当時、淨慈寺に再住していた如浄の許へ送られ、そのため如浄は「上堂」(『天童如浄和尚録』中、「再住淨慈寺語録」所載)しているのである。

無際の法嗣には、雪窓日・無鏡(境)徹・鼇(鰐)峰が知られてゐる。門人の一人には別山祖智が挙げられる。塔は寺の西、慈航了朴禪師塔の右側に建てられたとある。

○無際史料

- (1) 『枯崖和尚漫録』卷上〔続藏一四八、七七a〕に常州保安寺における「上堂」語や密庵下において塔を剪紙して

戯れに作った「頌」、それに「退院上堂」語を所載し、卷中「同上、八二b」には法嗣鼈峰定との機縁語がある。

(2)『増集続伝灯録』卷一〔正藏一四二、三七五a~b〕には、五種の「上堂」語を所載するが、いずれもどこの寺院のものかは不明である。

(3)『続伝灯録』卷三五〔正藏五一、七〇七b〕には、「題郁山主像偈」が一偈所載するのみ。

(4)『五灯会元統略』卷三〔正藏一三八、四五〇c〕(3)に同じ。

(5)『続灯存藁』卷一〔正藏一四五、一七a~b〕(2)に(3)を加えたもの。

(6)『五灯全書』卷四七〔正藏一四一、三四b~c〕「明州天童無際了派禪師」(5)と大同小異。

(7)『寺志』卷三〔二〇七~八〕には「補略」として「上堂」語三種を挙げるが、いずれも(2)に所収するもの。卷六〔四二五~四二七〕にも同じく「上堂」語二種と「頌」二句を所載。なおその「上堂」語の一種における冒頭語「釈迦昔向今辰入大寂定」は(2)において「釈迦老子昔向今辰入大寂定」とあるものである。またこの箇所に『寺

志』は「上二則住崇恩説攷補」と細字で注を附しているが、その典拠は「頌」二句と共に不明。卷七〔四九三〕には、「無際派禪師塔」の位置を本文に示す通りに記している。

(8)『続志』卷上〔一六丁表〕には、(1)の『枯崖漫録』の文を要約して所載。

(9)『阿育王山志』卷九〔中国仏寺史志彙刊、一一一、四九七〕は、(3)に同じ。

(10)『天童如淨和尚録』「再住淨慈寺語録」〔正藏四八、一二六c〕には、無際の遺書を受けとった如淨が上堂している。その「上堂」語は次の通り。「派和尚遺書至、上堂。

万派朝宗一派收、揚清激濁幾經秋、忽然到底都乾却、露柱燈籠笑不休。且道、笑箇甚麼。(下座同詣靈凡、差法供養)」これに拠れば、本文で述べたのと異なり、如淨は無際に深い哀悼の意を表しているといえる。

(11)鏡島元隆著『天童如淨禪師の研究』には無際と如淨との交渉を「一五・一六・七五・七六・八七・八八・一〇二・一一〇」の各箇所で闡説し、「派和尚遺書至上堂」語は「一六八~九」に詳しく述べてあるので参考されたい。

天童寺世代考(二) (吉田)

**前回
(禅研究所紀要12号) 分の正誤表**

貢段行

三

正

第十七 法為禪師

83 下 1 第廿七、法為禪師

第十七 法為禪師
慈航樸禪師
遠菴本體

89	85	85	83	83
下	下	下	下	下
5	12	11	4	1

119	118	117	112	93	89	85	85	83	83
上	上	上	上	上	下	下	下	下	下
19	1	7	5	3	5	12	11	4	1

第廿七 法為禪師
慈航撲禪師
遠菴本豎
天巖本眉禪師
第十三冊
遺址

第十七	法為禪師
慈航樸禪師	遠菴本體
天嶽本覺禪師	天嶽本覺禪師
第十三冊・第十四冊	第十三冊・第十四冊
遺址	遺址
統藏一四六、一四一c	統藏一四六、一四一c
同書は	同書は
統藏一四六、一二三c)	△伝未詳▽

1